

## 家庭の私的写真を多数集積、歴史的資産へ 政府系サイトも効果的ウェブ活用法学ぶチャンス

2000年12月31日から2001年12月31日まで、政府が主催する21世紀の幕開けの記念事業として、インターネット博覧会（インパク）が開催されている。新世紀のスタートを機に、インターネットの普及にはずみをつけるとともに、情報ネットワークを流れるコンテンツの作成能力を高めていくことが主な目的である。また、インターネット利用者の層の拡大が重視され、これまで情報化には縁遠かった人々への普及を図ることが目指されている。

2000年後半から、政府がかなり力点を置いて広報を展開していたにもかかわらず、反応は鈍く、イベントとしての盛り上がり欠けるのではないかと懸念されていた。しかし、幕開けのイベントには予想を大幅に上回るアクセスが殺到し、開会イベントの生中継がちゃんと見られないといった「事件」になるなど、予想以上に注目を集めるイベントとなった。特に年齢層の高い人々のアクセスが多く、インターネットの利用者の幅を広げようという目的に沿った展開をしている。

もっとも、「事件」が終息してから以降は話題になることも少なくなっている。物理的な空間を区切って開催される一般の博覧会とは違って、インターネットでは会場の内と外を区切る境界線がない。インパクの「パビリオン」として設置されているウェブページを見ることと、そうでない一般のウェブページを見ることの間には、特段の区別があるわけではない。となれば、何らかの「事件」でも起こらない限り、いまや世の中に無数に存在するウェブページのなかに、インパクのパビリオンが埋もれてしまうのも仕方ないことといえるだろう。

### インパクは何を残すのか

博覧会は、イベントとしての面白さや

展示の質など、観客に見える部分だけに価値があるのではない。それと並んで、博覧会を運営するという経験によって舞台裏に何を残すのかという観点からも評価されるべきものである。たとえば1996年に行われたインターネット・ワールドエキスポは、当時としては画期的な広帯域のネットワークを管理する技術と、イベントの生中継など、殺到するアクセスをさばきながら、動画などをいかに流していくかについてのノウハウを残したという。今回のインパクは、はたして何を残すのだろうか。会期を半分以上残している現時点ではまだ総括するには早すぎるのだが、少なくとも次のようなことはいえるのではないだろうか。

### 集団的な記憶を蓄積

1つは、電子的なアーカイブを不特定多数の人たちの参加によって作り上げていくという経験をもったことである。たとえば、毎日放送 や富士フィルム など、一般家庭に眠っている写真の投稿を受け付けて、撮影時期やテーマによって検索できるように蓄積していくサイトがいくつかある。

1枚だけ見れば、その当事者にとっての思い出としての価値をもつだけのアマチュア写真も、多数集積し、百年単位の歴史の中に位置づけていけば、その集積全体が歴史の証人としての価値をもつ。放っておけば死蔵されるだけで、やがては処分されてしまう家庭の写真だが、こういふきっかけがあれば歴史的な資産としての価値を与えられ、電子化されることによって永遠の生命を確保できる。1人1人がばらばらに活動しているだけでは実現できない集団的な記憶の構築を、インターネットという手段によって効果的に実現することができるという経験が、インパクによって得られた。その経験は、意図的に

歴史を残していくという取り組みに弱い傾向があった日本社会にとって、貴重な資産になり得るものだ。

### 効果的なウェブの活用法へ

インパクが将来に残すもう1つの経験は、多数のパビリオンが、アクセス数や企画内容によって継続的に競争する関係に置かれるということである。とくに自治体など政府関係のウェブサイトが多数インパクに参加していることがもつ意味は大きい。

これまで、政府系のサイトの多くは、まずそれが存在していることに意義があるという位置付けで運営されているように見えるものが多かった。他のところがやっているから、自分のところもホームページくらいもたないと恥ずかしいといった感覚が伝わってくるようなものも少なくなかった。しかし、インパクのようにアクセス数のランキングがはっきり出るイベントに参加すると、何をやれば多くの人に見てもらえるか、メッセージを効果的に伝えるためには何が必要なのか、といったことが否応なしに意識される。すでにいくつかのパビリオンは、インパクの開会から数か月の間に、ガラリーとデザインを変えたりしている。それだけ試行錯誤を強いる圧力がかかっているのである。そういう経験をもったときにはじめて、ウェブの効果的な活用法へのヒントが得られるのではないだろうか。

率直にいうと内容としては玉石混交という趣もあるイベントだが、全体としてはそれなりに意義のある資産を残す可能性をもつ。その成果に期待したい。

(廣瀬克哉 法政大学法学部教授)

[www.honya.co.jp/contents/magazine/  
booknavi/bn9701/bnb9701.html](http://www.honya.co.jp/contents/magazine/booknavi/bn9701/bnb9701.html)  
[mbs.co.jp/inpaku/](http://mbs.co.jp/inpaku/)  
[www.fujifilm.co.jp/inpaku/](http://www.fujifilm.co.jp/inpaku/)



## [インターネット白書 ARCHIVES] ご利用上の注意

このファイルは、株式会社インプレスR&Dが1996年～2012年までに発行したインターネットの年鑑『インターネット白書』の誌面をPDF化し、「インターネット白書 ARCHIVES」として以下のウェブサイトで公開しているものです。

<http://IWParchives.jp/>

このファイルをご利用いただくにあたり、下記の注意事項を必ずお読みください。

- 記載されている内容(技術解説、データ、URL、名称など)は発行当時のものです。
- 収録されている内容は著作権法上の保護を受けています。著作権はそれぞれの記事の著作者(執筆者、写真・図の作成者、編集部など)が保持しています。
- 著作者から許諾が得られなかった著作物は掲載されていない場合があります。
- このファイルの内容を改変したり、商用目的として再利用したりすることはできません。あくまで個人や企業の非商用利用での閲覧、複製、送信に限られます。
- 収録されている内容を何らかの媒体に引用としてご利用される際は、出典として媒体名および年号、該当ページ番号、発行元(株式会社インプレスR&D)などの情報をご明記ください。
- オリジナルの発行時点では、株式会社インプレスR&D(初期は株式会社インプレス)と著作権者は内容が正確なものであるように最大限に努めました。すべての情報が完全に正確であることは保証できません。このファイルの内容に起因する直接および間接的な損害に対して、一切の責任を負いません。お客様個人の責任においてご利用ください。

お問い合わせ先

株式会社インプレス R&D

✉ [iwp-info@impress.co.jp](mailto:iwp-info@impress.co.jp)